

農業技術センター普及指導部作物関係情報

タイトル：麦の生育状況と赤かび病の防除等について

発信日：平成 26 年 4 月 15 日

1 麦の生育状況について

(1) 気象状況

- ・ 気温は、1月中旬まではほぼ平年並みに経過していましたが、1月下旬以降は寒暖の差が激しく、1月6半旬、2月6半旬、3月6半旬は平年よりかなり高く、逆に、2月2～5半旬、3月2半旬は平年より低くなっています。
- ・ 降水量は、11～1月まで平年より少ない傾向でしたが、2月には積雪があり、2月以降、平年より多い傾向で推移しています。

(2) 生育状況

- ・ 2月中下旬の低温、積雪のため、生育（茎立ち）は平年よりやや遅い傾向でしたが、3月下旬以降の高温により、生育はほぼ平年並み～やや早くなっており、**出穂期は平年並み～やや早まるものと予想**されます。ただし、雪解けに時間がかかり、長期間にわたって積雪があったほ場では、出穂が遅れる可能性もあります。
- ・ 大麦は、一部で鳥害が見られましたが、現在は回復しており、概ね順調に生育しています。小麦では、積雪の影響により、一部で葉先の痛みが見られましたが、一般的に生育は順調です。

2 麦の赤かび病について

(1) 赤かび病とは

- ・ 麦類の穂に感染するかびによる病気で、感染すると、麦の小穂が桃～赤色になり、子実の登熟が阻害され、発病が著しいと不稔になります。
- ・ 農産物検査規格では、赤かび病被害粒が 0.0%を超えて混入してはならないと定められており、これを越えた場合には規格外となります。
- ・ また、赤かび病は、病原菌が毒素（デオキシニバレノール（略称：DON）、ニバレノール（略称：NIV））を生成し、DON については、小麦において食品衛生法の暫定基準値 1.1ppm が定められており、分析値がこれを越えた場合、出荷できなくなります。
- ・ **このため、農薬による防除の徹底が必要です。神奈川県内の小麦・大麦では、2年前の平成 24 年に県内各地で赤かび病が多発しました。**



(2) 発生しやすい条件

- ・ 出穂期以降の気温が高く、降雨が続くなど湿った条件で感染しやすくなります。
- ・ 最も感染しやすい時期は、開花期から 10 日間です。（大麦では4月中下旬、小麦では4月下旬から5月上旬にあたります）。
- ・ 特に、出穂期以降の気温が 18～20 を越え、湿度 80%以上が3日以上続く場合や降雨、濃霧による日照不足が続く場合に多発します。
- ・ 病原菌（かび）は、前年のわらや刈り株に付いており、湿潤条件下で孢子を飛散し、発病の原因になります。（早い年では3月中旬頃から孢子を飛散します。）

(3) 赤かび病への対応

ア 農薬散布

- ・ 赤かび病の発生を防ぐため、トップジンM水和剤、ベルコート水和剤等により必ず防除します。
- ・ 防除する場合は、「開花始め～開花期」と「開花期の1週間後」の2回散布すると効果が高くなります。（1回目と2回目の間は約7～10日間）

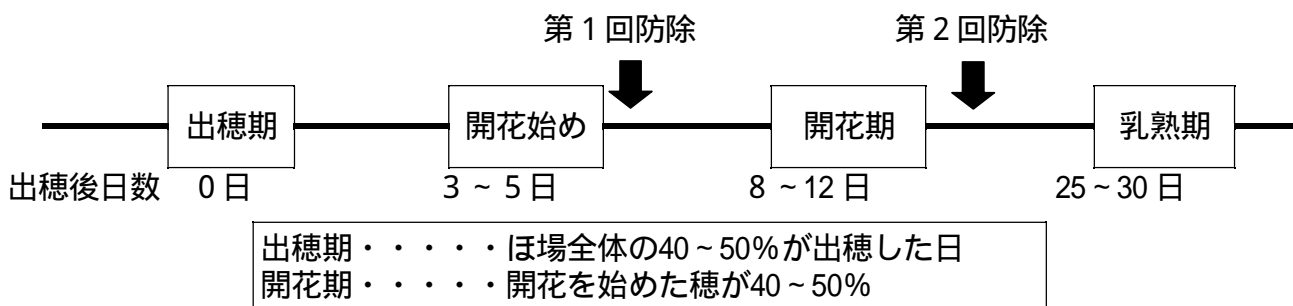


図 麦の生育ステージと防除時期の目安

- ・ 農薬散布によって発病程度が軽減された場合でも、かび毒が生じることがあります。赤かび病の発生が見られた場合には、かび毒の生成を抑制するため、開花期 20 日後（出穂期 30 日後頃）の追加防除が有効です。

イ 適切な収穫・乾燥調製

- ・ 農薬散布を行っても赤かび病の発生が見られた場合は、かび毒の増加を抑制するため、収穫・乾燥調製時に次の対策を実施します。
- ・ 刈り遅れは、かび毒の産生を助長するため、適期収穫を徹底します。
- ・ 収穫後、乾燥するまでの間にかび毒が増加することがありますので、収穫後は速やかに乾燥を行います。
- ・ 赤かび病の被害粒は、粒厚が薄い傾向がありますので、粒厚選別（2.0mm 以上）により強めの粒選別（調製）を行います。
- ・ 収穫時に赤かび病の発生程度を確認し、発生が多いほ場や倒伏が見られたほ場では、分別して収穫し、その後の乾燥調製作業も仕分け管理を徹底します。

3 麦の凍霜害について

(1) 凍霜害の発生する条件と本年の状況

- ・ 麦が伸び始める「茎立ち期」以降に、地表面から 3 cm 程度の気温が氷点下になると、幼穂に障害が出ます。最低気温が氷点下 2 度以下で被害が発生し、氷点下 7 度以下で被害

が大きくなります。(11月中旬に播種した大麦、小麦に危険性が高く、12月播きの大麦、小麦にも被害の危険性があります。)

- ・ 本年は、茎立ち期にあたる3月後半からこれまでに、最低気温が氷点下となった日は、5回(農業技術センター水田圃場(平塚市寺田縄))ありましたが、凍霜害の心配は少ないものと考えられます。

(2) 凍霜害への対応

- ・ 大麦は、4月上中旬(11月中旬播種で出穂直前～出穂始め)に追肥(窒素成分で10a当たり2～3kgを基準)を行い、粒数の確保と登熟促進を図ります。
- ・ 小麦は、4月上旬(11月中旬播種で出穂25～15日前)に追肥(窒素成分で10a当たり2～3kgを基準)を行い、粒数の確保と登熟促進を図ります。
- ・ 一般に、幼穂凍死被害が出ると、補償作用で退化粒の抑制や遅れ穂が多くなることにより、減収につながることも多いですが、粒の熟期幅が広がり、収穫適期の判断が難しくなり未熟粒の割合が増加し、外観品質が低下する傾向があります。

4 収穫適期の判定方法

- ・ 登熟日数：出穂後の日数
- ・ 生育状況：穂の成熟・色の変化(黄熟)程度、茎葉の枯れ上がり程度

表 麦の出穂期・成熟期平年値

(農業技術センター(平塚市上吉沢畑圃場)・11月19日播種)

麦種	品種名	出穂期		成熟期 平年	登熟 日数	収穫の目安
		平年	本年			
大麦	さやかぜ	4月16日	4月11日	5月28日	43日	大方の穂が湾曲し、芒や穂の一部に緑色が残っているが、概ね穂が黄熟した状態
	カシマゴール	4月9日	4月5日	5月24日	45日	
小麦	農林61号	4月22日		6月11日	50日	止め葉の一部を残し茎葉がほぼ枯れ上がり、概ね穂が黄熟した状態
	ユメシホウ	4月17日		6月4日	48日	
	さとのそら	4月18日		6月5日	49日	
	ゆめかおり	4月19日		6月6日	49日	

(注) 平年値は、収穫年次で平成22～25年の4カ年の平均とした。

本年の出穂期は、平年並み～やや早くなると予想されます。